

マレーシアのロングステイ事情

—現地調査2009・2010を踏まえて—

黒田 明雄

倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

(2010年10月1日 受理)

1 はじめに

ロングツーリズムは多様化してきている。その中には、ロングステイや世界一周クルーズ、ワーキングホリデイ、語学留学、国内ロングステイ、田舎暮らし、車旅等々がある。¹⁾

ロングステイとえば、これまで経済的に恵まれた退職者の余暇を利用した海外長期滞在のイメージがあった。近年、アジア諸国(マレーシア、タイ、フィリピン、インドネシア、台湾など)にロングステイ先を見出すシニア世代が増え大衆化が進んでいる。人それぞれにロングステイに至るきっかけがある。ロングステイしている人は必ずしも海外経験が豊富な人や語学力がある人ばかりではない。マレーシア政府は、東京と大阪に観光支局を置き、公式サイトや各地のセミナーで日本人観光客や長期滞在者の誘致に力を入れている。2010年4月にも岡山市でマレーシア政府観光局のイベントセミナーが開催された。約200名の参加者の多くはシニア世代であり、関心の高さを裏付けるものであった。

「財団法人ロングステイ財団」²⁾は、1992年(平成4)に通商産業省(現:経済産業省)の認可により公益法人としてロングステイの普及・



写真1 日本参入のエアアジア

啓発に取り組む目的で設立された。(以下、L S財団と記述) L S財団は調査研究や季刊誌『LONG STAY』の発行、各種セミナー、HPでの情報提供などの事業を展開している。L S財団には問い合わせや相談が寄せられ、少人数の組織ではあるが、重要な役割を担っている。L S財団の『ロングステイ調査統計2010』(2010)によると、マレーシアが2006年から連続4年日本人の希望滞在先第一位になっている。筆者は隣国のシンガポール駐在経験を生かし、L S財団の登録ロングステイアドバイザー³⁾・RCA海外留学アドバイザー⁴⁾として、マレーシアやシンガポールを中心に相談活動をおこなっている。

今日、一般市民がロングステイや海外暮らしの情報を得ることは容易になった。インターネットや書籍、各種セミナーへの参加、ロングステイ経験者でつくる同好会などから一定の情報を得ることができる。パソコンを前に「マレーシア ロングステイ」と打ち込み検

索すると、瞬時に膨大な情報の山に遭遇する。また、マレーシアに関する書籍『月15万円年金で暮らせる海外リゾート 常春のマレーシア キャメロン・ハイランド』(2002)、『マレーシアでロングステイ』(2004)、『住んでわかった快適海外生活ベナン』(2004)、『ご褒美人生マレーシア』(2006)、『マレーシアで暮らす』(2007)、『マレーシア コタキナバルなら実現できる1日1000円のゴルフライフ』(2008)などで、体験者の様子や総合的な情報に触れることができる。肯定的に編集された書籍内容が多い。これらの中で『マレーシア暮らしのハンドブック』(2007)は長期滞在有志による生活支援情報誌である。『年金夫婦の海外移住』(2008)は取材をもとに危機管理面に焦点を当てた書である。『空手とビジネスと マレーシアに花開く人生の黄金期』(2010)は退職後の人生の過ごし方を考える上で参考になる自叙伝である。『マレーシアに定住でご褒美人生』(2010)はロングステイヤーの貴重な経験が多く載せられ、これから生活する人にとって手引きとなるものである。

筆者の知る限り、体験や取材による上記の一般書籍、同好会や個人、関連業者のホームページ、個人のブログはあるものの、マレーシアのロングステイに関する先行研究は皆無に等しい。先駆的な学術成果としては、科研費による「高齢者社会と国際移住に関する文化人類学的研究：東南アジア・オセアニア地域を中心に」(代表：宮崎 2005-2008)がある。この研究を踏まえ、山下は『観光人類学の挑戦』(2010)の第7章で、日本人のロングステイを日本版の「国際退職者移住」(international retirement migration)とみなし、マレーシアとバリでの調査に基づいて考察している。また、小野はロングステイを国際退職移住の一部ととらえ、マレーシアを事例に日本人高齢者の移住や商品化について研究発表⁵⁾(2009-2010)している。

筆者はアドバイザー活動や現地調査をしながら、マレーシアにどれくらいの方がどのような形で滞在しているのか実態が把握されていないことを感じてきた。また、LS財団は、5つの特徴(視点)からロングステイを総合的に定義しているが、普及や啓発を目的とするため、現地の幅広い多様な滞在スタイルの実態まで言及していない。

アドバイザーには、相談者の質問や不安に応え、マイナス面も含めた専門地域の最新情報を提供する役割がある。また、相談内容によっては、適切に国内外の専門機関を紹介する必要がある。マレーシアはいろいろなことが日々変化している国であり、行政機関の役人であっても対応が異なる場合もある。したがって、新しい情報を得やすい現地の人とネットワークを築いておくことが重要である。現地サポート会社⁶⁾への取材を通じて、これからロングステイを考える人には、医療サポートや危機管理への対応、資金運用など、生活する上で遭遇する諸問題への客観的総合的アドバイスの必要性を感じている。

本稿は、上記の問題意識から、マレーシアに関するロングステイ研究に取り組む。研究目的は以下の3点である。

①LS財団の定義するロングステイの各特徴とロングステイヤーのスタイルを関係付け

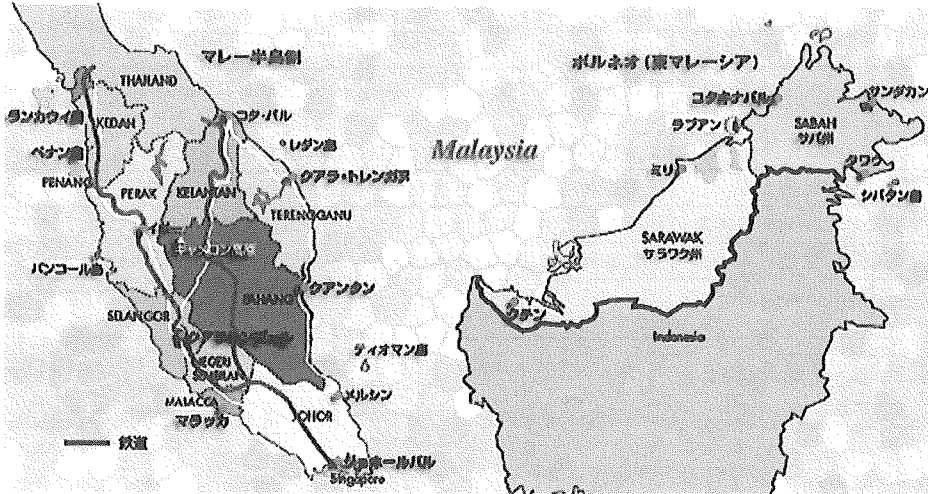


図 マレーシア全土 マレーシア政府観光局公式サイトHPより転載

て実態を把握し、アドバイザーの立場から考察する。

- ②L S財団の調査統計から日本人のロングステイ希望国の推移を把握する。
- ③マレーシアの長期滞在ビザの内容及び日本を含むMM2Hビザ⁷⁾の取得件数を把握する。

研究にあたっては、2回の現地調査(2009.8と2010.8)を踏まえた。⁸⁾日本人が多くロングステイしているクアラルンプール、ペナン、イポー、キャメロンハイランド、コタキナバルの5地域でロングステイヤーにインタビューを実施した。また、マレーシア政府移民局や政府観光局、動物検疫局、在マレーシア日本国大使館、領事館、日本人会事務局、現地MM2Hビザ申請会社(以下、エージェントと記述)に取材を申し込み、ロングステイに関する情報収集をおこなった。

2 ロングステイの定義

「LONGSTAY」及び「ロングステイ」の名称は財団法人ロングステイ財団の登録商標である。ロングステイの期間やスタイルは人によって異なる。L S財団ではロングステイを以下のように定めている。⁹⁾

生活の主たる源泉を日本に置きながら海外一箇所に比較的長く滞在し(2週間以上)、その国の文化や生活に触れ、現地社会での貢献を通じて国際親善に寄与する海外滞在型余暇を総称したものである。

また、L S財団はロングステイの特徴¹⁰⁾を5点挙げている。これらの要素をすべて含んでいるものがロングステイに該当する。

以下に、上記5つのロングステイの各特徴をマレーシアでのロングステイヤーへのインタビューと関係付け、長期滞在の実態を述べ、アドバイザーの視点から考察を加える。

表1 ロングステイの特徴

	5つの特徴	備考
1	比較的長期滞在	移住・永住ではなく日本への帰国を前提とした2週間以上の滞在であること
2	住居を海外に保有・賃貸	生活に必要な設備が整った住居を保有または賃貸していること
3	余暇を目的とする	余暇を利用したさまざまな活動により海外で豊かな時間を過ごすこと
4	旅よりも生活をめざす	短期旅行スタイルでは味わえない海外生活を日常の環境で過ごすこと
5	資金の源泉は日本	主たる資金の源泉は日本にあり、現地で労働や収入を伴わないこと

1) 比較的長期滞在

マレーシアでのロングステイは大別すると2タイプになる。それぞれに期間の長短がある。

一つ目は3ヶ月有効のビザなし滞在を利用するタイプである。このビザを有効に活用すると、期限が切れる前に日本や隣国に出国し再入国する。そうすれば約半年間、180日まで滞在可能となる。夏や冬、花粉の季節を避けて長期滞在することができ、毎年、渡り鳥のように暑さ寒さを避けて住み分ける人は多い。賃貸ユニットの予約をして帰国するリピーター組もいる。

ビザなしで3ヶ月滞在できることを利用し、出入国を繰り返し複数年滞在している人も一部にいる。日本を出国する際にマレーシアで入国を拒否される場合があると警告された人もいる。しかし、これまでマレーシアの入国審査では大きな問題になっていない。あるエージェントによると極稀に説明を求められるケースもあったと言う。ビザなしで出入国を繰り返し連続的に滞在する人は、MM2Hビザ取得者とは考え方が異なり、長期滞在ビザ取得の利点や必要性を重要視していないように思われる。

二つ目は10年間出入り自由なソーシャル・ビジット・パス（訪問ビザ）を取得して長期滞在するタイプである。通称MM2H（マレーシア・マイ・セカンド・ホーム・プログラム）と呼ばれている。MM2Hビザの取得には一定の資金が必要であるが優遇措置¹¹⁾もある。永住権や市民権は得られないが、期間の延長も可能であり、実質いつまでも滞在することが可能である。

この長期滞在ビザの取得者をセカンドホームと呼び、ビザなしロングステイヤーと区別している。彼らの中にはマレーシアを終の棲家と考えている人がいて、遺言を弁護士に委ね、相続や墓地の問題まで決めている人もいた。マレーシアでの滞在が長期化しているセカンドホームには、高齢化に伴い介護の問題は急を要する課題であり、現在も継続的に検討されている。LS財団の定義では、ロングステイは「帰国を前提とした滞在」であるが、この特徴の範囲におさまらないロングステイヤーが誕生している。

2) 住居を海外に賃貸・保有

住居の選定は重要なアドバイスのポイントである。生活費に占める割合が多いのが住居費である。大半のロングステイヤーはコンドミニアムの賃貸ユニットを利用している。日本の住居感覚からするとかなり広い。ほとんどのロングステイヤーは、3ベットルームの賃貸ユニットに住んでいる。オーナーは、マレーシア人とは限らず、シンガポールや香港などから投資目的で賃貸している場合もある。



写真2 賃貸コンドミニウム

一般的に日本人は支払い期限を守り、部屋をきれいに使用することが知られていて、日本人に貸したいオーナーは多い。賃貸契約が1年ないし複数年であれば安くなるし、数ヶ月のみの滞在であればユニットの賃貸料は高くなる。ビザなし滞在のロングステイヤーが1年契約する場合もある。同じ建物のユニットであっても、オーナーにより部屋の雰囲気や設備が異なり、賃貸価格には幅がある。いざ住み始めてみると不具合が見つかり、解決に至らずオーナーとのトラブルが起きることは、珍しいことではない。交渉の際に書面に必要事項を明記し、納得した上で契約することが必要である。契約に不慣れな場合は、エージェントや信頼のおける人の助けを借りた方が得策である。

ある住居仲介エージェントから日本人のユニット選びに対する傾向を聞いた。「長期滞在をするロングステイヤーの中には、日本人の少ないコンドミニウムや日本人が生活しているユニットが視覚に入らないユニットを選ぼうとする。」ということである。これには日本人社会から一定の距離を置いた生活をしようとする意識が背景にある。日本でのしがらみを離れたロングステイであるが、情報を得るためには面識のない日本人社会との付き合いが必要である。肩書社会を離れても、価値観や考え方の異なる人と顔を会わさなければならない状況が起きる。話題は生活上のノウハウや人のこと、自分の過去などに限定されてくる。そこにわずらわしさが生まれる。気の合う人とのみ付き合いをすると割り切っている人が多く、海外のロングステイ社会の中でも日本社会の出来事と同じことが見られる。ロングステイ力のある人は現地社会との接点が多くなり、日本人社会と適度な距離を保ち生活を楽しむ傾向がある。

長期滞在を考えたセカンドホームには、住居を購入することが認められている。現在は25万RM以上の物件を自宅や賃貸ユニットとして所有できる。新しいユニットを購入して内装に経費をかける場合と中古ユニットを購入してリノベーションする場合がある。マレーシアは経済成長が続いていてコンドミニアムの建設ラッシュが続いており、供給過剰の感もある。購入については売却のことも考え、弁護士に相談するなど慎重な対応が必要である。

3) 余暇を目的とする

第二の人生の余暇をロングステイに使うことを選択すると、これまでの人間関係から解放されて、毎日が時間の拘束のない休日祝日の状態になる。しかし、ロングステイを選択しただけで豊かな人生を保障されたことにはならない。ロングステイに入ると当分は異文化の中で余暇時間の使い方を模索する。サークル活動への参加や誰と付き合うかは自由である。



写真3 インディアカ同好会

のんびり過ごすことを目的にしても、することがないと暇をもてあましてしまう。滞在を楽しんでいるロングステイヤーは、したいことや役割をもち、忙しい日々を過ごしている。ゴルフをして楽しむ人は多い。ロングステイヤーに1週間の日程をたずねたが、人それぞれのスタイルがあった。生き生きと過ごしている人を多く見かけた反面、ロングステイを選択しても早期に引き上げて帰国してしまう人もいることが分かった。欧米人と違い言葉にハンディがある日本人の場合は、狭い日本人同士の付き合いの中に情報や支援、居場所を求めようとする。うわさや批判にさらされると居心地は悪くなる。海外生活を始めると、新たな日本人との出会いがある。「徐々に親しい人間関係を築き、適度な距離を保った付き合いを心がけている。」と語った人は多かった。

ロングステイヤーの傾向は2つに大別される。なんとか自分で問題解決をしようと自立努力するタイプと、いつまでも周囲の人に支援を求める依頼心の強いタイプである。退職者にとって現地では日本での肩書よりもロングステイ力が重要である。言うまでもないことであるが、ロングステイヤーに求められる資質は前者である。英語ができることは有利であるが、現状を受け入れ、自立心のある人の方が現地への適応が早い。

L S財団ではロングステイの基本的な考え方に「現地社会での貢献や国際親善」を含めている。ある領事は「現地の人との積極的な交流を期待したい」と、また、あるエージェントは「もう少しボランティアをして現地に貢献することが大切」と話した。コミュニケーション能力がある人は、自ら現地社会に入り、知人や友人をつくっていた。ロングステイヤーは駐在員と異なり、時間に余裕がある。余暇を自分のためだけに使うのではなく、現地社会と何らかの交流を心がけることが求められる。

調査活動中に公共交通機関やタクシーを利用した。タクシー運転手は、日本人のほとんどが英語を話せないと思っている。行き先の書かれたカードを手渡すだけの日本人もいると言う。マレーシアは英語の通じる社会である。シニアのロングステイにおいて、現地の人と最低限の日常会話ができるくらいの英語力を身につける自己努力は不可欠であろう。

どのような余暇利用の仕方があるのか、1週間の生活日程を知ることにより、生活スタ

イルや傾向を把握することができる。余暇を利用して参加できる同好会やサークル活動の実態把握も課題となる。

4) 旅よりも生活をめざす

慣れ親しんだ日本の家を離れ、異なる国での生活には最初から困難が付きまとう。住居の契約、トラブルの処理、衛星放送の契約、インターネットの接続、銀行口座の開設、公共料金の支払い、病院、航空券の予約、車の運転など、日本ではあまり時間がかからないことに多くの時間をとられる。自分一人ではできないことも起きてくる。問題解決を楽しむ気持ちがあればよいが、「日本ではありえないこと・・・日本とは違う・・・」



写真4 賃貸コンドミニウムの室内

を連発し、寛容な気持ちになれないとストレスが溜まる。長期滞在を楽しんでいる人は、さまざまな経験から生活力ノウハウを蓄積している。経験の浅い人は先人の知恵に学ぶことが大切である。同時に、善意に甘えるばかりでなく、時には有料サポート会社を利用して情報やサービスを享受する選択肢をとることも必要である。

一年の半分以上をマレーシアで生活する場合は、日本の自宅がある市役所などの地方自治体や年金機構、金融機関などに日馬租税協定の書類や在留証明書を提出することは節税の知恵である。ただし、MM2H ビザを取得して住民票を抜いた場合は、海外で治療を受けても国民健康保険の恩恵を受けることができないので注意を要する。高齢者にとって、保険は大きな課題であるので慎重な調べが必要である。

住居費に次ぐ支出は食費である。食事と健康は軽視できない。ローカル食は安価で美味しいものが多いが、油分や糖分を多く含んでいる。現地のあるドクターは日頃食べなれた日本食のよさを認めていた。輸入日本食の購入や日本料理店で外食の多い生活をするコストは高くつく。健康管理を考え、現地の食材を用いて工夫し、これまで食べていた食生活をする人は多い。単身の男性の場合、好みの複数の行き付けの店を利用しているケースがあった。年金や預貯金が主な生活源であるロングステイヤーにとって、日本人との交流と日本料理店の利用頻度は支出に大きく関係しており、生活スタイルを決めるポイントとなっている。いわゆる付き合い費の問題であり、日本人社会と適度な距離を保って生活をする人が多い理由もここにある。

病気、特に持病のある人の場合は、病院の十分な下調べと準備が必要である。クアラルンプールやペナン島には、日本人スタッフや日本語のできるスタッフがいる設備の整った民間の総合病院がある。医療事情の異なる国であるので、事前にアドバイザーなどから最新情報や対応の仕方を聞いておくことを勧めたい。

現地で起きることに対しては、基本的には自己責任である。多くのロングステイヤーが「いつまでも善意の助けに甘えるのではなく、時には対価を払いサービスを得ることも必要である。」と強調した。ロングステイの大衆化に伴って、各地域での日本人ロングステイヤーのための生活サポート体制は重要な課題である。クアラルンプールでは、お助けマシンの有志（長期滞在経験者）が「暮らしの便利帳」を作成して、さまざまな分野のニーズに応えている。

5) 資金の源泉は日本

LS財団はロングステイのひとつの特徴を「主たる生活資金の源泉は日本にあり、現地での労働や収入を必要としないものであること」と定めている。円高を利用し物価の安い国で、年金や預貯金などを有効活用できるのがロングステイのメリットでもある。

年金（国民・厚生）は日本でもマレーシアでもどちらでも受け取れる制度になっている。生活資金の移動方法は以下の通りである。①帰国時に日本円を持ち込み交換レートにより両替する。②日本の銀行から国際送金する。③キャッシュカードを使ってATMで引き出す。④トラベラーズチェックを利用する。

利息のよいマレーシアの銀行に定期預金をして、元本をできるだけ減らさないようにする人もいる。資金運用については、人それぞれの知恵があった。資金移動や資金運用は、これからロングステイを考える人には関心の高い内容である。

生活費の違いは暮らし方の違いである。人それぞれ生活スタイルは異なり、かける経費も相当な幅があった。「年金15万円」「月6万円」という数字がマスコミで象徴的に紹介され、ひとり歩きしている。日本の住居維持にかかる費用、マレーシアと日本の往復費用、日本帰国時の生活費、海外旅行費用などは意外とかかるものである。長期滞在ビザを取得し、生活の足場をマレーシアにおいてしまえば、できないことではない。日本にも生活の足場をおき、ある程度の豊かさを求めるロングステイヤーならば、少々無理があると思われる。

セキュリティ付の安全なコンドミニアム賃貸ユニットで生活する場合は、マレーシアの生活に月15万円から20万円程度以上かかると考えた方がよい。多くのセカンドホームヤーやロングステイヤーにインタビューして、経費をかけない生活スタイルの人もいたが、大半はある程度の経費をかけて豊かさを享受していた。

マレーシア政府観光局は、日本の各都市でセミナーを開き、日本人のMM2Hビザ申請を期待している。日本人の場合、平均的な給与や年金であっても、マレーシアでは豊かな層に入り、マレーシア国民の10倍の経済効果を産むと考えられている。マレーシア政府観光局は、イランやバングラディシュなどでは、富裕層のみを対象としたセミナーを開催している。

マレーシア政府のMM2Hビザ発給は、豊かな国に住む日本人が落とす経済効果へ期待

したものである。したがって、一定の条件をクリアーしている豊かさがあるのに、ある程度のお金を落とさずに節約生活に徹していると、同じセカンドホームやエージェントの目には不自然な姿に映る場合もある。タイやフィリピンなどに比べて、ビザ発給条件の高いマレーシアにおいても、「年金難民」と揶揄されているのを耳にした。

MM2H ビザ取得に伴う優遇措置として、一定の条件下で専門的な知識や技術をもつ人に週 20 時間までのパートタイム就労が認められた。筆者は現在、申請をした人認可された人を知らないが、規定がある以上、就労の認可を受ける人ができる可能性がある。ここにも L S 財団のロングステイの特徴の範囲におさまらない状況が生じている。

L S 財団のロングステイの 5 つの特徴 (視点) をもとに、インタビューからロングステイヤーの実態を把握し、アドバイザーの視点から考察をおこなった。マレーシアの 5 地域でロングステイヤーにインタビューを実施した結果、検証すべき課題が浮かび上がってきた。夫婦二人での滞在、親との滞在、子供との滞在、兄弟姉妹での滞在、単身での滞在、そこには人それぞれの生活スタイルがあり、日本社会の縮図が持ち込まれている感じがした。

3 日本人のロングステイ希望上位滞在先

L S 財団の 2010 年度版『ロングステイ調査統計』¹²⁾ の意識調査から、希望滞在先ベスト 10¹³⁾ は表 2 の通りである。この調査は L S 財団が実施した主催・共催セミナーやイベント (2009 年 4 月から 2010 年 3 月まで) に参加した 26,618 名 (有効回答者数 4,932 名) の集計結果と過去の調査結果に基づくものである。

ロングステイ希望上位国の推移をみると、マレーシアが 10 年前からベスト 10 に登場し、年々人気が出てきている。2006 年から連続 4 年第一位になっている。これにはさまざまな理由が考えられる。その重要な要因のひとつは 10 年間の滞在を許可する長期滞在ビザの発給である。さらに治安がよいこと、物価が安いこと、インフラが整備されていること、親日的であること、英語が通用すること、暖かい気候であること、フライト時間が短いこ

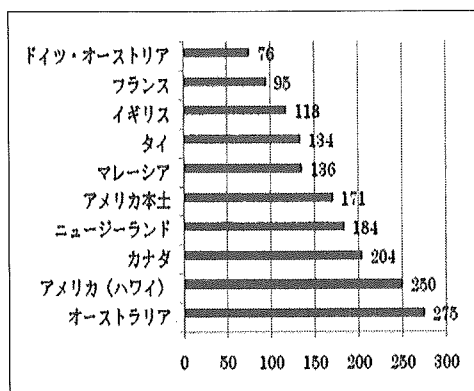
表 2 ロングステイ希望上位国ベスト 10 の推移

	1992年	%	2000年	%	2005年	%	2006年	%	2009年	%
1	ハワイ	15	オーストラリア	15	オーストラリア	16	マレーシア	15	マレーシア	18
2	カナダ	12	ハワイ	10	マレーシア	15	オーストラリア	14	ハワイ	12
3	オーストラリア	12	ニュージーランド	10	ハワイ	12	タイ	11	オーストラリア	10
4	イギリス	7	カナダ	8.7	ニュージーランド	11	ニュージーランド	11	タイ	10
5	ニュージーランド	5.4	スペイン	8.2	タイ	11	ハワイ	9.9	ニュージーランド	8.7
6	スイス	5.2	イギリス	5.7	カナダ	11	カナダ	8.5	カナダ	8.3
7	イギリス	5.1	スイス	3.9	スペイン	5.4	スペイン	4	フィリピン	4.2
8	フランス	4.7	イタリア	3.9	イギリス	3.3	インドネシア		インドネシア	3.7
9	スペイン	4.1	アメリカ西海岸	3.3	アメリカ本土	3.2	イギリス	3	スペイン	3.7
10	アメリカ東海岸	3.8	マレーシア	3	フィリピン・フランス	2.6	アメリカ本土	2.8	アメリカ本土	3.6

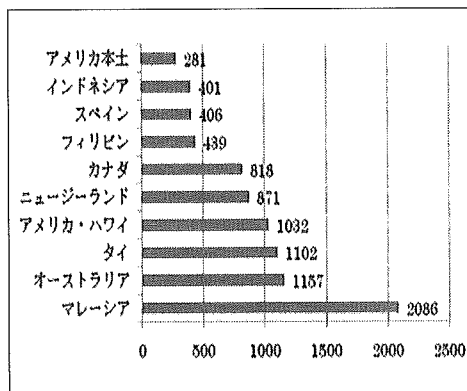
L S 財団の 2010 年版調査統計より転載

と、マレーシアを拠点として安価で旅行がしやすいことなどである。マレーシア政府が観光を重視した施策を実施していることも大きな要因である。よい面ばかりではないが、総合的にみて他のアジアのロングステイ先の中では条件が整っている。

40代未満と40代以上の世代別の滞在希望先のデータを比較する。(グラフ1と2参照)ロングステイを現実的に考える40歳以上の年代になると希望先も変化してくる。オーストラリア、ハワイ、ニュージーランド、カナダは上位に位置するものの、マレーシアを第一位にあげる人が多い。近年、タイをはじめフィリピン、インドネシアも10位以内に入る人気国である。これらの国々ではマレーシアよりもトータルな生活費が押さえられることに大きな要因がある。



グラフ1 10代～30代の希望国順位
(人数)



グラフ2 40代～60代以降の希望国順位
(人数)

オーストラリアは2005年に投資退職者ビザに変更し条件が厳しくなった。人気があるオーストラリア、ハワイ、ニュージーランド、カナダでは、住居費を含めたトータルの滞在費はアジアに比べて高い。単純に比較はできないが、1ヶ月のロングステイはマレーシアの倍以上となる。近いアジアの国々を選択する人は、物価が重要な決め手要因となるとともに、現地の雰囲気になじめるかどうかも重要なポイントになる。

アドバイザーとしての相談活動では、プラス面だけでなくマイナス面も含めて客観的に情報提供する必要がある。MM2Hビザを取得し長期滞在を考えている人は、ビザなし滞在中で一定期間の下見生活をし、実際に肌で異文化に触れ、確認をすることを勧める。また、複数の先輩ロングステイヤーから話を聞くことで準備も容易になる。

4 マレーシア・シルバー・ヘアー・プログラムとマレーシア・マイ・セカンド・ホーム・プログラム

マレーシア政府の長期滞在ビザMM2Hの発給に至る経緯を把握する。

通商産業省(現:経済産業省)から「シルバーコロンビア計画“92”豊かな第二の人生を海外で過ごすための海外居住支援事業」が提唱されたのはバブル絶頂期1986年のこと

表3 シルバー・ヘアー・プログラム・ビザ取得国及び件数

順位	国・地域	1996	1997	1998	1999	2000	2001	合計
5	中国 (香港含)	-	-	-	4	19	24	47
	バングラディシュ	-	-	-	-	-	-	0
1	イギリス	5	9	15	49	40	46	164
4	日本	-	3	4	26	26	20	79
2	シンガポール	-	-	-	38	38	42	118
3	台湾	-	-	-	32	32	35	99
	イラン	-	-	-	-	-	-	0
6	インドネシア	-	-	-	8	20	17	45
7	インド	-	-	-	2	4	18	24
8	パキスタン	-	-	-	3	3	1	7
9	韓国	-	-	-	2	2	1	5
	その他	2	6	4	59	73	96	240
	合計	7	18	23	223	257	300	828

1987年にMSHPビザが導入されたが、その統計はなく、公表されている統計は1996年から2001年までである。数値は夫婦・単身・家族を含むが、人数に関係なく1件としてカウントしている。マレーシアMM2Hセンターの公表をもとに筆者作成。

であった。この計画はスペインで老後を過ごすイギリス人やドイツ人にヒントを得て発案されたものである。準備期間を経て1992年を目標に構想されたが、内外からのさまざまな批判を受けて計画は中止になった。

翌年1987年にマレーシア政府は「マレーシア・シルバー・ヘアー・プログラム」(MSHP: Malaysia Silver Hair Program)の制度を導入した。これはマレーシアの外国企業を退職した55歳以上のヨーロッパ人と日本人などに最高15年まで滞在可能なビザを発給するものであった。この制度は2001年まで続いたが、条件が厳しく、合計828件とマレーシア政府の期待を大きく裏切る発給状況¹⁴⁾であった。(表3参照)

そこで、マレーシア政府は年齢制限や申請条件を大幅に緩和して、2002年に「マレーシア・マイ・セカンド・ホーム・プログラム」(MM2H P: Malaysia My Second Home Program)に制度を改正した。これは最高5年間有効な出入り自由なSocial Visit Pass(訪問ビザ)であった。通常MM2Hビザと呼び、現在は最高10年間となっている。永住権は得られないが、延長も可能な世界に類をみない優遇されたビザである。

50歳以上の申請条件のポイントは、35万RM(約1RM≒30円)以上の資産証明と15万RMのマレーシア国内への貯金である。つまり働かなくても十分な生活資金があることを証明しなければならない。世界各国(一部の国¹⁵⁾を除く)、一定の条件を満たせば発給される。MM2Hビザ本申請の移民局オフィスを訪問した際に、許可がおりるのを待っている多くのイスラム圏の申請者を目にした。このMM2Hビザを取得するためには、仮申請は政府に認可されたエージェントに書類の提出をゆだねる方法と個人申請をする方法がある。本申請は必ず本人が出向いて手続きをしなければならない。

前述したように、この長期滞在ビザを得て実際にマレーシアに住んでいる人をセカンドホームと呼んでいる。正確にはビザなしロングステイヤーと区別している。どちらにも

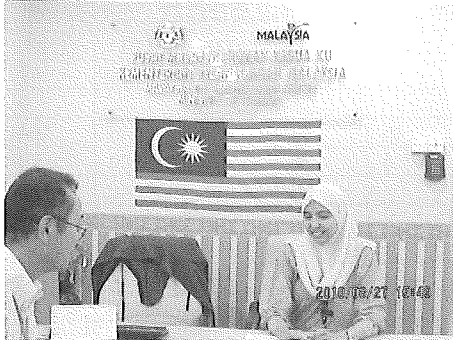


写真5 MM2Hセンターの窓口



写真6 移民局で許可を待つ人

経済効果を期待している。

マレーシア政府のマハティール元首相はかつて欧米の価値観一辺倒でなく「ルック・イースト政策」を実施し、日本を発展のモデルにしてきた。そのためマレーシアには日本製品が多く普及している。一般的に勤勉で規範意識の高い日本人の滞在は歓迎されていると言える。

5 MM2Hビザの取得状況

マレーシア政府観光省のMM2Hセンターの統計をもとにビザ取得状況¹⁶⁾を把握する。(表4参照)下記の表のデータからは、いろいろなことが読み取れる。MM2Hビザの制度ができてからは、マレーシア・シルバー・ヘアー・プログラム・ビザ取得状況と順位が入れ替わっている。2010年4月末の合計をみると、5位の中国が1位、1位のイギリスが3位である。ベスト10に入らなかったバングラディシュやイランが2位と5位にあがってきている。旧植民地支配国であったイギリスや、宗教的、民族的、言語的に共通する国

表4 マレーシア・マイ・セカンド・ホーム・プログラム・ビザ取得上位国及び件数

	国・地域	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	合計
1	中国(香港含)	241	521	468	502	242	90	120	114	119	2,417
2	バングラディシュ	0	32	204	852	341	149	68	86	65	1,797
3	イギリス	108	159	210	199	209	240	208	162	111	1,606
4	日本	49	99	42	87	157	198	210	169	168	1,179
5	イラン	0	2	8	7	9	59	227	212	198	722
6	シンガポール	96	143	91	62	94	58	48	61	61	714
7	台湾	38	95	140	186	63	31	16	36	38	643
8	インド	45	123	118	80	51	46	32	35	44	574
9	パキスタン	9	55	82	104	36	31	65	103	69	554
10	インドネシア	88	118	104	54	63	25	27	53	21	553
11	韓国	5	12	66	60	65	152	86	*37	39	522
	その他	139	286	384	422	399	424	405	510	317	3,286
	合計	818	1,645	1,917	2,615	1,729	1,503	1,512	1,578	1,250	14,567

*MM2Hビザが実施された2002年3月から2010年10月までの取得数である。数値は夫婦・単身・家族を含むが、人数に関係なく1件としてカウントしている。マレーシアMM2Hセンター公表をもとに筆者作成。韓国の2009年の実数は不明。

や地域が上位に名を連ねてきている。日本や韓国は企業が進出して経済発展に貢献をしている国である。

2010年10月までの合計で、世界各国に約14,500件のMM2Hビザ取得者がいる。日本からは1,179件(夫婦・単身・家族を含む)がMM2Hビザを取得している。団塊世代が退職時期を迎え、近年約200件前後のペースでセカンドホームが増えている。今後もこのペースで増加することが予想される。1,179件の中には、すでにビザを返納して帰国した人やビザを早く取得して時期がきたら滞在を考えている人も含まれる。そのような人にも会いインタビューをおこなった。公表されているデータの詳細について、マレーシア政府観光局大阪支局に問い合わせたが、これ以上の詳細については把握されていなかった。

調査の過程で得た情報によれば、イギリスや日本、シンガポールのMM2Hビザ取得者はシニアの退職者が大半を占める。しかし、国によっては投資目的や子供の留学目的のケースも含まれる。また、宗教的に共通するイスラム国家のバングラディシュやイランなどがベスト10に入っている。韓国の場合は子供の将来を考え、語学留学(英語、中国語など)を目的に母親と滞在するケースがある。韓国人の生徒が多く在籍する学校もあった。マレーシアMM2Hセンターへの確認や他国のセカンドホームへのインタビューにより、さらなる実態を把握することを課題のひとつとしたい。

マレーシアのロングステイヤーの実数については、ビザなし滞在も含まれ、正確な数字を把握しにくい。そこで、在マレーシア日本国大使館や領事館の在留届調査(2009.10.1)から、現在滞在しているMM2Hビザ取得セカンドホームの数を把握した。この在留届は、旅券法第16条でマレーシアに3ヶ月以上滞在する場合に在外公館に提出をするように義務付けられている。在外公館を統括するマレーシア日本国大使館領事部によると、マ

表5 MM2Hビザ取得邦人数(2009.10.1在留届)

マレーシアの在外公館	人数
在マレーシア日本国大使館	246
在マレーシア・ペナン領事館	399
在マレーシア・コタキナバル領事館	47
在マレーシア・ジョホールバル出張駐在事務所	9
合計	701

レーシア全体では701人のセカンドホームが滞在している。領事へのインタビュー¹⁷⁾から、マレーシアのどこに滞在しているのかを以下に示す。(表5参照)

半島部の在マレーシア日本国大使館は首都クアラルンプール及びキャメロンハイランドを含むマレーシア中部4州を管轄している。クアラルンプール市内には130人、キャメロンハイランドには20人の登録がある。ペナン領事館はペナン島及びイポーを含む半島部の北部5州を管轄している。ペナン領事館によるとペナン島に大半が滞在している。ジョホールバル出張駐在事務所は南部の広大なジョホール州を管轄しているが、ここは9人と取得者は少ない。ボルネオ島のコタキナバル領事館はサバ州とサラワク州の2州を管轄し

ている。コタキナバル領事館によると約20組のセカンドホームەرが滞在している。合計701人(前年度比16.2%増)の全体の男女比は6:4である。大使館領事部は、今後も団塊の世代の退職に伴い、MM2Hビザ取得者が増加することを予想している。

L S財団は、前述したように2週間以上をロングステイと定義している。ロングステイの期間や生活スタイルは、プチ滞在から複数年の滞在、終の棲家とする滞在まで多種多様である。

マレーシアに1年間に約40万人の日本人が入国しているデータがある。MM2Hビザを取得したセカンドホームەرの概数は把握できたが、ビザなしで3ヶ月以内の滞在をしたり、出入国を繰り返し3ヶ月以上滞在したりしているロングステイヤーの概数は把握できていない。

気候が一定したマレーシアで療養を目的とする人や日本の冬と夏を避けてゴルフを楽しむ人などの数は相当数¹⁸⁾いる。このようなロングステイヤーは、ペナンやキャメロンハイランド、コタキナバルのコンドミニアムのユニットやホテルを利用した3ヶ月未満の滞在である。ビザなしロングステイヤーには、在留届を最寄りの在外公館に提出する義務はないので、セカンドホームەرのように実数を把握しにくい。今後、ビザなしロングステイヤーの概数を把握することも課題である。

6 おわりに

本稿は、マレーシアでの日本人のロングステイを総合的に研究するファーストステップである。研究の目的を以下の3点に置いた。

- ① L S財団のロングステイの定義をロングステイヤーの生活スタイルとからめて実態を把握し、ロングステイアドバイザーの立場から考察した。
- ② L S財団の調査統計から日本人のロングステイ希望滞在先の推移を把握した。
- ③ マレーシア政府観光省のデータから日本を含むMM2Hビザの取得件数を把握した。また、在外公館へのインタビューからマレーシア各地の日本人のセカンドホームەر数を明らかにした。

本研究は2009.8と2010.8の2回の現地調査に基づいており、多くのロングステイヤーや関係機関の協力を得ている。

調査の過程で今後の研究課題が浮かび上がってきた。例えば、日本人と他国の滞在スタイルの比較や介護の問題など残存する研究課題は多岐にわたる。

ロングステイはパッケージ旅行と異なり生活を伴う。調査活動を通じて、そこには、ある意味で日本社会の縮図があるように思われた。

注及び引用文献

- 1) JTBグループの旅の販促研究所は『長旅時代 ロングツーリズムの実態と展望』（2007）で多種多様なタイプを取り上げている。
- 2) 財団法人ロングステイ財団の歩み及び詳細は公式サイト<http://www.longstay.or.jp/>を参照。
- 3) 登録ロングステイアドバイザーは、2007年より財団法人ロングステイ財団主催で研修講座を開始した。研修を受講し一定水準を認められるとアドバイザーとして登録される。筆者は2008年に登録ロングステイアドバイザーとなって相談活動の一翼を担っている。アドバイザーとなる人は、ファイナンシャルプランナーの資格を有する人や旅行業界に勤める人のほか、駐在経験やロングステイ経験のある人が多い。
- 4) 特定非営利活動法人留学協会が2004年から認定資格試験を実施して、合格者にRCA海外留学アドバイザーの資格認定をしている。筆者は、登録ロングステイアドバイザーの相談活動でシニアの語学留学希望者の相談や留学生の教育に関わることがあるので、2010年6月に取得した。留学協会の公式サイト<http://www.ryugakukyokai.or.jp>を参照。
- 5) 小野真由美の研究発表「国際退職移住とロンステイツーリズム：日本人高齢者のマレーシア移住」（2009.11.20京都大学）、「国際退職移住の商品化：ロングステイ・ツーリズムと日本人高齢者」（2010.6.13立教大学）がある。
- 6) 現地でマレーシア政府の認可を受けたMM2Hビザ代理申請会社が住宅や生活の世話、困ったことや悩みの相談への対応をしている。ビジネスとしてどこまで対応すればよいのか苦慮するという話も聞いた。英語力が十分でないので問題の処理に困る人は多いが、自らの意志で海外生活を選択しながら、自立心の弱い人が多いのも日本人ロングステイヤーの特徴のように思われる。
- 7) MM2Hビザとは、Malaysia My Second Home Program の略、正式にはMultiple-entry Social VisitPass と言い、10年間出入りが認められた長期滞在ビザのことである。詳細な説明はマレーシア観光省の公式サイト<http://mm2h.gov.my/statistic.php>を参照。
- 8) 2回の現地調査は2009年8月7日から8月21日（クアラルンプール、ペナン、シンガポール）と2010年8月5日から8月30日（クアラルンプール、コタキナバル、ペナン、イポー、キャメロンハイランド）である。
- 9) 財団法人ロングステイ財団編『ロングステイ調査統計2010』（財）ロングステイ財団、p2、2010。
- 10) 前掲書8）p2。
- 11) MM2Hビザの特典はいくつかある。無税で日本の中古乗用車を1台輸入できること。家族(子供や両親)を同行することができること。50万RM以上の家が2軒購入できること。お手伝いが一人雇えること。50歳以上で専門職に限り、会社申請の場合、週20時間以内のパートタイム就労が認められる。
- 12) 前掲書8）p18。
- 13) 前掲書8）p20。
- 14) マレーシア・シルバー・ヘアー・プログラムビザの取得国及び件数は<http://mm2h.gov.my/statistic.php>のstatisticを参照。
- 15) イスラエルとユーゴスラビア国籍を除く扱いが取られている。
- 16) 前掲サイト13) を参照、マレーシア・マイ・セカンド・ホーム・プログラムビザの取得国及び件数。
- 17) 2010年8月26日に在マレーシア日本国大使館にて町田領事にインタビューをおこなった。在留届をもとにマレーシアの各地域に滞在するMM2Hビザを取得しているセカンドホームの人数を把握した。
- 18) ペナンについては、ビザなしロングステイヤーがユニットの仲介契約を依頼しているココナッツクラブ（2010年8月19日）やオーバーシーズ リビング（2010年8月18日）などの会社で状況取材した。キャメロンハイランド（2010年8月24日）では、キャメロン会の会員でビザなしロングステイヤーの宿泊滞在状況や利用価格をヘリテージホテルの総支配人に取材した。コタキナバルについては、キナバル・ハイランド・クラブの初代会長久保田豊氏及び関係者に電話取材をおこなった。これらの取材から、年間にゴルフ等でのビザなしロングステイヤーが相当いることが分かった。

参考文献

- The Expat MM2H MALAYSIA MY SECOND HOME GUIDE 2010 (国外の居住者のための長期滞在ビザガイド2010年版)
<http://www.longstay.or.jp/> 財団法人ロングステイ財団公式サイトHP。
財団法人ロングステイ財団編『LONGATAY』(財)ロングステイ財団年4回発行季刊誌。
<http://mm2h.gov.my/statistic.php> マレーシア観光省マレーシア・マイ・セカンド・ホームセンターの公式サイトHP。
<http://www.tourismmalaysia.or.jp/> 日本のマレーシア政府観光局公式サイトHP。
クアラルンプールに暮らす編『クアラルンプールに暮らす(第3版)』日本貿易振興会、2002。
久保田豊『月15万円年金生活で暮らせる海外リゾート 常春のマレーシア キャメロンハイランド』イカロス出版、2002。
ラシン編『マレーシアでロングステイ』イカロス出版、2004。
スタジオダク編著『住んでわかった快適海外生活ベナン』ノースランド出版、2004。
立道和子『年金月21万円の海外暮らし実現ガイド』文藝春秋、2005。
渡邊明彦・石原影太郎『リタイアメント・パラダイス・マレーシア 第一部 ベナン編』日馬プレス、2006。
阪本恭彦『ご褒美人生マレーシア』イカロス出版、2006。
東京ニュース通信社編『マレーシア時間』東京ニュース通信社、2007。
お助けマンクラブ有志『マレーシア暮らしのハンドブック』クアラルンプール日本人会、2007。
トラベルビジョン編『マレーシアで暮らす』星運社、2007。
犬塚浩志編『滞在旅行 マレーシア』クレイブ、2008。
久保田豊『マレーシア コタキナバルなら実現できる1日1000円のゴルフライフ』イカロス出版、2008。
井出康博『年金夫婦の海外移住』小学館、2008。
財団法人ロングステイ財団編・監『プロがすすめるロングステイガイドブック』トラベルビジョン、2008。
戸部勲・鈴木利枝子編『ハッピーロングステイ』イカロス出版、2009。
谷田茂『空手とビジネスと マレーシアに花開く人生の黄金期』SIC、2010。
阪本恭彦・洋子『マレーシアに定住でご褒美人生』カナリア書房、2010。
エヌ・エヌ・ケー/リロケーション・インターナショナル編『海外赴任2010』キョーハンブックス、2010。
Shikauchi他2名編『ハローマレーシア2011』CEM Asia Sdn. Bhd、2010。
財団法人ロングステイ財団編『ロングステイ調査統計2010』(財)ロングステイ財団、2010。

Situation of Japanese Longstayers in Malaysia —On the basis of Interview Investigation—

Akio KURODA

*College of Science and Industrial Technology
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received October1, 2010)*

This paper is the first step to examine the actual situation of the Japanese longstayers in Malaysia. The Japanese Longstayers are MM2H visa holders and No visa stayers. This is a kind of multihabitation or the Japanese international retirement migration.

The following was clarified:

1. To make clear the definitions of the word “Long Stay” used by Long Stay Foundation.
2. To confirm the transition of which countries Japanese hope to stay in.
3. To clarify the number of MM2H visa holders by Ministry of Tourism Malaysia.
4. To clarify which area in Malaysia MM2H visa holders live in, and how many holders live there by interviewing the Japanese consuls.

This paper is based on the field surveys in 2009.8 and 2010.8. I obtained the cooperation from many MM2H visa holders and agencies.

In the course of the investigation further research has surfaced. For example, comparison of stayers' life style between Japanese and the people from other countries and there are many problems such as health care issues, etc.

There are much difference in the actual life between long term staying and package tours. In a sense, we can see a microcosm of Japanese society in their life.